



楽

2月27日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

何かが聞こえた。見上げるとそこには音楽があった。

* * *

ワンピースの水着を来た美少女がバスの中に立っている。夢のなかでそんなイメージが浮かんだので、おれはそれを撮ろうと思った。宮橋に電話してモデルの候補を選ばせよう。自分で探しに行くのが本当なのだが、いまそれをやると問題になるだろう。ロケの手配は長谷川に頼ろう。一番安心して任せられる。バスの少女は何処へ行くのだろう。まわりの乗客はどんな反応をするだろう。少女は最初から水着で乗って来たのか、それともバスの中で水着になったのか。どうしてあんなにさびしそうな表情をしていたのだろうか。

あやうくまた眠ってしまうところだった。ここで寝直してしまうと、もうイメージを覚えている可能性は限りなくゼロだ。こういう心から撮りたいと思えるイメージが湧くことは滅多にないんだ。このチャンスを逃してなるものか。それからおれは身を起こし、そして、ここが刑務所の中だということ思い出した。病院の待合室の長椅子のようなベッドの上で、長椅子のように足を降ろして座り、それでもまだしばらくバスの中の少女のイメージを追い求め、それを撮影する手段のことを考えてしまう。これを覚えていられるだろうか。仮に覚えていられたとして、出所する時にもおれはこれを撮りたいと心から思っているだろうか。そのころにもまだ宮橋や長谷川と一緒に仕事をしてくれるだろうか。

次にこんな風に写真を撮りたいと思える日が来るのはいつのことだろうか。暗い独房の中でそう考えてからおれは舌打ちをした。どこか他の房からくぐもった怒鳴り声が聞こえた。寝言なのかもしれないが、まるでおれの舌打ちに反応したように思え、おれはびくっとする。そしてびくっと反応した自分が情けなく、余計に悲しくなる。次にこんな風に写真を撮りたいと思える日が来るのはいつのことだろうか、だって？ 次なんかありはしない。おれにはもう写真を撮る日など来ない。おれにはその資格がない。

昔はこんな風じゃなかった。おれはカメラを持って出かけることそのものが好きだった。行く先々で何でも撮った。人でも、花でも、車でも、街角でも、自然の風景でも。撮りたいものは世界中にあふれていた。歩いていても、バスに揺られても、電車の中でも、世界はおれに撮られるのを待っていた。おれがカメラに収め、現像し、焼き付け、トリミングし、定着することで、世界の見方を決定づけたのだ。世界がおれを選び、世界がおれに見て欲しがっていたのだ。

わたしの一番綺麗なところを撮って。それを写真にしてみんなに見せて。わたしの一番綺麗なところを。かわいいところを。魅力的なところを。アンニュイな表情を。はかなげな様子を。恐ろしい形相を。奔放な姿態を。他の誰にも見せたことのない、あなただけに見せる姿をカメラに収め、わたしのほんとうをみんなに教えてあげて。わたしは本当はどんなに美しく、可憐で、楽しく、偉大で、恐ろしく、あさましく、淫らで、そして神々しいかを、その正しい見方を教えてあげて。わたしを撮って。わたしの匂いを撮って。わたしを舐めるとどんな味がするか、わたしの肌触りとぬくもりはどんな風か撮って。わたしの声と歌を撮って。

それが、いつしか世界は閉ざされてしまった。おれは言われて渋々カメラを持つようになり、仕事をくれる知り合いに愛想笑いを浮かべ、スタジオのクルーに当たり散らし、確信の持てないままライティングを決め、モデルに齒の浮くような声をかけ、シャッターを押す指に力を入れる。そのうちろくでもない連中からしか仕事が出来なくなった。アブノーマルなポルノだの、児童ポルノだの、浮気の証拠写真だの、樹海の遺体だの、浮浪者の遺体だの、そんなものを言われるままに撮っていてはおれもカメラも駄目になって行くのはわかっていたが、おれにはそれを止めることができなかった。

スナッフフィルムと呼ばれるものが存在することは聞いたことがあったが、それはあくまでも

都市伝説の類で、ホラムービーのネタのようなものだと思っていた。だから連れていかれた現場で女が犯され、切り刻まれ、死に至るまでを撮影して初めて、おれはそれが実際に存在することを知った。何も考えずにシャッターを切り続けていたが、全てが終わって、女が泣き叫んでいたのは演技でもなんでもなく、おれはただ欲望を満たすためだけの殺人の片棒をかついでしまったことをようやく悟った。

その日どうやって家に帰ったのか覚えていない。泥のような眠りから覚めると、出かけた時のままのまっかこうだった。気がついたらカメラの機材をそっくりどこかに置いて来たらしく、家の中には見当たらなかった。そしてそれでいい、とおれは思った。おれはどうすればあの女に償えばいいかわからず食べることもできずただ家に閉じこもり続けていた。恐ろしくて恐ろしくて電気を消しカーテンを引いた部屋の中で震え続けた。もうおれには撮る資格がない。自分で捨ててしまったんだ。世界が再びおれを選ぶことはない。警察が踏み込んで来た時には救われたとさえ思った。

突然目に光が当たり、おれは小さく悲鳴を上げて光源を見た。

それは独房の壁の高いところに開いた小さな窓から差し込む月明かりだった。満月に近い月がやけにくっきりと明るい光でおれの顔を照らしていた。次の瞬間、おれはその光景を少し離れた場所で見ている。独房の高い窓からさえざえとした月の光が流れ込み、ベッドにすわる男の顔を照らしている。その独房は縦長の箱のようなもので、そこには月の光が次から次に入っていく。独房の中は月の光の断片で満たされていく。ベッドに腰掛けるおれを離れたところから見ているおれは、すでに独房を離れ、その縦長な箱を外から眺めている。投票箱だ、とおれは思った。それは信任投票なのだ。その男に、ベッドに腰掛ける男にまだ世界を撮らせるかどうかを、世界が投票で決めているのだ。独房を満たしていく光を見ながらおれは祈った。撮らせてください。

次の瞬間、おれは独房の中に戻っていた。月は角度を変えたらしくもう独房の中は暗闇に戻っていた。たったいま見たビジョンに身体が震えていた。そして気がつくとおれはまだしきりに撮らせてください、撮らせてくださいと呟いていた。頬を熱い涙が流れていることにもその時になって初めて気づいた。どこかからまた怒鳴る声が聞こえたがもう気にならなかった。おれは手を合わせ、はっきりと声に出して、撮らせてください、撮らせてくださいと祈った。

その時何かが聞こえた。見上げるとそこには音楽があった。月がいなくなった窓から見える小さな夜空に、月明かりを浴びた雲がすばやく流れ去るのが見え、おれにははっきりとそのメロディーが聞こえたのだ。手元にカメラはなかったがおれはその音楽を撮った。そしてこれを最初の一枚にしますと胸の内をつぶやいた。

(「投票」 ordered by いんちょ〜♪♪-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

楽

<http://p.booklog.jp/book/45170>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45170>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45170>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.